

# かくれんぼう

作 ラビンドラナート・タゴール

訳 内山眞理子

ぼくがふざけっこして

一 チャンバの花のふりをして

朝はやく木のこずえで

わかば 若葉のなかにうずもれていたら

おかあさまから見えないけれど

ぼくのことをわかるかしら。

おかあさまは呼ぶでしょう「坊や、どこなの」

ぼくはだまってくすすわらっていますよ。

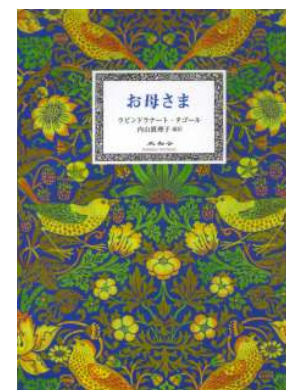
おかあさまがお仕事をしているのを

のこらずぜんぶ見つめていますよ。

二 ゆあみしておかあさまはチャンパの樹下をとおって

洗い髪のまま河からもどってこられる

ここをとおってお祈り部屋へむかわれます



この詩がのっている本  
ラビンドラナート・タゴール 著  
内山眞理子 編訳  
『お母さま』(未知谷刊) P55

一 チャンパ プルメリア(インドソケイ)  
二 ゆあみ お風呂に入ること。

遠くからチャンパの花の匂いがしますー

でもおかあさまにはわからないでしょうね

坊やのからだの匂いがしていることを。

三 昼さがりにみんなの食事がすむとおかあさまは

四 マハーバーラタの本を手にすわります

樹の影が部屋の窓からはいってきて

おかあさまの膝や背中におちるでしょう

ぼくはじぶんのちいさな影を

おかあさまの本のうえにゆらします

おかあさまにはわからないでしょう

坊やの影がおかあさまの目にうつっているのを。

夕暮れどきにランプの灯をともし

おかあさまは牛小屋にゆかれます

そのときぼくは花のまねをして

ぼんと地面のうえにおりてきますよ。

するとまたぼくはおかあさまの子になって

「おはなしをして」とたのみます。

三 昼さがり お昼の 12 時を少しすぎたころ

四 マハーバーラタ インドの古代のおはなし。

「どこにいたの、いたずらっ子さん」とおかあさま  
「それはないしよだよ」とぼくはこたえます。

詩集『おさなご』所収